

京都の町ことばにおける方言文表現

江 端 義 夫

はじめに

1、 従来の研究

京都のことばは、歴史が古く、伝統のある古都の文化である。日本全国の方言研究において、京都のことばの歴史的現実態を把握することの意義は、とりわけ大きい。柳田国男の方言周圏論をはじめとする言語理論の発見やその実証のためにも、京都のことばの研究の進展が、望まれる。

井之口有一、畑井令以知らは、京都市での、伝統的職業集団の言語法に注目し、京都のことばの研究を、精力的に推進している。それらは、次のとおりである。

1 井之口有一・畑井令以知・中井和子『尼門跡の言語生活の調査研究』昭和40年8月

2 井之口有一・畑井令以知『京都語位相の調査研究』昭和47年1月

3 同右 『御所ことば』八風俗文化史選書12V』昭和49年10月

4 同右 『京都語辞典』昭和50年2月

5 井之口有一「京都市室町・西陣・祇園における言語生活の調査研究(1)(2)」(「京都府立大学術報告」19・20)昭和42年10月、昭和43年10月

6 同右 「京都市室町商人・西陣機屋・祇園花街・賀茂農家における敬語行動の実態的調査研究」(「聖母女学院短大研究紀要」

3) 昭和45年2月

7 畑井令以知「京都方言の諸相」(「愛知大総合郷土研究紀要」18)

昭和48年3月

8 同右 「京都御所のことば」(「言語」大修館書店) 昭和52年

1月~6月

9 同右 「京都のことば」(「言語」大修館書店) 昭和53年1月~

6月 京都のことばの実態が、これらによって、少しく明らかにされてきている。しかし、これらには、文アクセントの表記がない。いまままで、京都の方言生活の現実が、生きのよいかたちで報告されることは、稀であったかもしれない。今後、さらに多くの研究者が京都ことばの記述的研究を行なうべきであると思う。

2、 京都市中京区辺域の方言生活

京都市の中央部に、中京区がある。京都の町ことばの典型は、中京区の室町通り界隈で行なわれる言語生活であるとされる。室町通りには、問屋街があり、古風な商家の伝統が維持されている。

一九七五年七月二十五日と二十六日の二日間、筆者は、京都市中京区室町通り竹屋町を中心に、同中京区下町通り丸田町、同中京区屋根小路柳通りなどで、老年層男女について、方言の調査研究に従った。

以下には、挨拶表現をはじめとして、諸文表現について、京都市

中京区辺域の方言生活を記述し、京都の町ことばの特性を、指摘しようとする。

京都市中区辺域の町家一般では、日常、どのような方言生活が行なわれているのであろうか。当該域の方言として、注目される12種類の方言文表現について、京都の町ことばの特徴が著しい表現形式をとりあげて、記述する。

一、挨拶表現

1、朝の挨拶表現

京都人は、挨拶に、入念な心を込める。近隣の人へ

○オハヨーサンデス。おはようさまです。

と言う。普通の言いかたとしては、

○オハヨーサン。おはようさま。

がある。男は、主として、後者の言いかたを行なう。

さらに、簡単な挨拶がある。

○オハヨー。おはよう。

女は、右のような「サン」を除去した挨拶表現は、あまり、行なわない。

女が行なう朝の挨拶表現は、次のとおりである。

○オハヨーサンドス。おはようさまです。

京都人の情は、挨拶心に表われる。たとえば、次のような表現心理が、その発想基盤に存する。

○ナー シラン ヒトデモ カオ ミテ シツテル シトワ オ
ハヨーゴザイマス ユーテ ネットーリマスケド。名を知らない人

でも、顔(を)見て知っている人(に)は、おはようございます(と)言っつてね。通りますけど。

2、路上での出会いの挨拶

盛夏の日中などに、老女が、同年輩の人に対して、次のような挨拶をする。

○ホンマニ アツイ ネー。アツイ コト オヘン カー。ほんとうに、暑いねえ。暑いこと、ないですか。

心やすい人に向つては、

○アツイヤ ナイ。ノ。暑いじゃないの？

である。もっと心やすい人などへは、

○アツイ ネー。暑いねえ。

と声をかける。しかし、目上の人に対しては、

○オアツイ コトア ゴザイマス ナー。お暑いことでございます。

すねえ。

となる。これは、全国共通の言いかたと、あまり変らない。

3、訪問の挨拶

気がねのある家を訪問するばあいに、共通語ふうの挨拶が、行なわれる。それは、改まって、服の一枚も着替えていくようなばあいの、挨拶である。

○ゴメンクダサイ。ごめんください。

これが、もっとも丁寧なもの言いである。よく、使用されている。

次は、心やすい近所の家を訪問するばあいの挨拶である。

○オイヤス カー。いらっしやいますか。

○ゴメンヤス。ごめんください。

次は、夜、他家を訪問する際、戸口で行なう挨拶である。

○コンバンワ。こんばんは。

○オシマイヤス。おしまいなさい（こんばんは。）。

近隣の親しい人を、訪問者として迎える際の挨拶は、次のとおりである。

○マー アガットクレヤス。アツイ オヘンカ。まあ、上ってください。暑いではありませんか。

また、「普通のアイソ」（不断の挨拶）であれば、次のようである。

○エー キコーニ ナリマシタ ナー。マー アガットクレヤス。いい気候になりましたねえ。まあ、上ってください。

これは、「愛想」である。初めての訪問者は、このような挨拶で待遇されても、居間へ上ってはいけない。「アガットクレヤス」と誘う方も、客人が、実際に上ることを意図していないのが、常である。京都人が、挨拶を、愛想と心得ているばあいがあるからである。商売を営む家では、

○オイデヤス。いらっしやいませ。

と挨拶して、人を迎える。「イラッシャイマシ」などは、ほとんど、聞かれない。

4、辞去の挨拶表現

他家を訪問し、用件を済ませて辞去する。その際、次のような挨拶表現が行なわれる。

○エライ ヤブンニ オジャマシマシタ。たいへん夜分に、お邪

魔しました。

○ナガイ コト オセワニ ナリマシタ。サヨナラ。長いあいだ、お世話になりました。さようなら。

これらは、上等の言いかたである。中等の言いかたは、次のようである。

○ナガイ コト スミマセン ナー。長いあいだ、すみませんねえ。

次のは、辞去の挨拶表現に対する、家人の挨拶表現である。

○イーエ。マタ キト オクレヤッシャ。いいえ。また、来ておくれなさいよ。

5、労働中の人への挨拶表現

労働している知人の傍を、通りがかったばあい、

○オキバリヤス。お気張りなさいませね（精が出ますね）。
のような挨拶が行なわれる。また、

○マダ オシヤス。まだ、なさいませね。

のように、状況を即座に表現した言いかたが、行なわれる。ところで、次のは、京都市郊外で聞かれた挨拶である。

○オシマイヤス。おしまいなさい。

右について、土地人は、「マー ココラーデワ ネ。オシマイヤス イワハラ シマヘン ネ。ムコーノ イナカノ ホーエ イキマスト ネ。まあ、ここらではね。オシマイヤスと言いなさいませんね。向うの田舎の方へ行きますとね」のように、解説する。

6、入浴についての挨拶表現

もらい風呂に行く。家人よりも先に、風呂に入る。このときの挨拶表現は、次のようである。

○サキー オフロ イタダキマス。先に、お風呂に入らせていただきます。

共同浴場から帰る近所の人に、路上で出合う。次のような挨拶表現が、行なわれる。

○オハヨー オシタ ナー。ホナ サヨナラ。早かったですね。では、さようなら。

以上の挨拶表現は、日常の挨拶であった。次には、特別時の挨拶表現について、考察する。

7、結婚の挨拶表現

結婚についての習俗は、土地柄に即して、多様である。京都市中京区辺域では、見合結婚が、ほとんどであったと言われる。老女は、「キョートワ マシテ ソードシタ ナ。京都は、(他地方に)増して、そう(見合結婚ばかり)でしたね」と強調する。

嫁をもらった家の老男に、数日後、路上で出合つて、老男が次のように挨拶をする。

○センジツワ オヒガラモ ヨロシユー オトドコリ ノーオスマシニ ナリマシテ オメデト。先日は、お日柄もよろしく、滞りなく(結婚式を)お済ましになりました、おめでと

う。
これは、格式を尊んだ挨拶表現である。別の挨拶表現がある。それは、次のとおりである。

○オタクサン コンド エー オヨメサン モライヤシテ オメ

デトサンドス。

お宅さん(は)、今度、いいお嫁さん(を) もらいなさつて、おめでとうさまです。

結婚祝いの返しを受けとつたときには、次のような挨拶表現がある。

○オカド ヒロー ゴザリマスニ コノ ホーマデ ケッコーナ
オイワイオ イタダキマシテ アリガトー ゴザイマス。

お門(が) ありがとうございますのに、この方まで、結構なお祝いをいただきまして、ありがとうございます。

挨拶表現を通して、ていねいでねんごろな、つきあいが、保持されていたのである。

ところで、町家の人の言語環境と、社会階層が上位である人の言語環境とは、顕著な差があった。後者は、たとえば、次のようである。

「ホンデ エー オウチャツタラ タイガイ ウシロカラ オトモガ ツイテ イキマシタ。それで、いいお家だったら、たいがい、後からお伴がついて行きました。」

また、室町通りにある上階層の呉服問屋の家族は、

「ホトンド オクリムカエドツセ。ほとんど、送り迎いですよ。」
のような生活である。かつまた、

「子ドモサンデモ ガッコエ イカハルノデモ ナ。アノーダレナト オクツテ イカハルトカネ。子どもさんでも、学校へ行きなさるのでもね。あのう、誰なりと、送って行きなさるとかね。」

のような状態であった。さらに、乳母が従事することによって、し

つけが、行なわれた。

「ホイテ オンバハンガ イハルシ ネー。そして、乳母さんが、いなざるしねえ。」

8、出産の挨拶表現

○オヨロコビニ ナリマシテ……。お慶びになりまして……。

「お慶びになり云々」の表現形式が、即、出産の祝言を意味する。おもしろい。

次の挨拶表現は右の例よりも、少しく丁寧である。

9、弔の挨拶表現

弔いの挨拶は、総じて、調子がゆっくりしている。しかも、表現の途中で、言いさしになるばあいがある。

○ワルー オシタ ナー。おわるくございましたねえ。

○コノ タビワ オクヤミガ デケマシテ……。この度は、お悔みができました……。

○オチカラ オトシデ シダイニ オサビシユー ゴザイマス。

お力落して、しだいに、お淋しくございます。

○コノ タビワ オキノドクサマナ コト デケマシテ……。この度は、お気の毒さまなこと（が）、できました……。

「て」止めの表現によって、言外に心を残す表現法は、弔の挨拶表現として、一般的である。

10、正月の挨拶表現など

元旦には、朝のうちに、勤め先へ、簡単な挨拶に行く。これが

土地の習慣である。そのとき、正月の挨拶が、次のように行なわれる。

○フユトシワ イロイロ オセワニ ナリマシテ アリガトー

ゴザイマシタ。昨年は、いろいろお世話になりました、ありがとうございます。

また、毎月一日には、「オツイタチアイサツ」が、行なわれていた。このごろは、それがすたれた。

以上、当該域における町家の挨拶表現は、生活そのものであることが、知られよう。挨拶表現によって、人と生活とが、強く結びつけられているようである。

室町商人、西陣、祇園の職業集団には、「事始め」、「大晦日」、「年始」、「八朔」など、年中行事に関する「挨拶」が、行なわれている。

諸社会生活の節ごとに、挨拶表現が、重要な位置を占めているのである。

二、応答表現

肯定の応答表現は、同等関係で、次のように、行なわれている。

○ソードス。そうです。

少しく丁寧な応答表現は、次のとおりである。

○サヨーデ ゴザイマス。さようでございます。

最近では、全国共通語の影響で、「ドス」よりも「デス」の方が多くなり、次のような応答表現が、一般的な言いかたとされる。

○ソーデッシャロ。そうですよ？

○ソーデス ナー。そうですねえ。

三、質問表現

質問表現に、「ーマス・ヤロ」の表現形式が、よく行なわれている。

○イーマツシヤロ。言いますでしょ？

○スクノツシヤロ。少ないでしょ？

○ガッコー デテ ナニ シタラ オハリ ナライニ イタリ
シマツシヤロ。学校を卒業して、何したら、裁縫を習いに行つたりしますでしょ？

次のばあいも、右の諸例と同様に、文の末部の一音節を、上げ調子にすることで、質問表現が、仕立てられている。

○ドコー オイキヤスノドス。どこへお行きなさるのですか？

○ドー シヤシタノドス。どうしなさったのですか？

○ドー オシヤシタノドス。どうしなさったのですか？

他方、尊敬の助動詞「ハル」を使用した質問表現が、ある。

○オニーチャンニ アワハッター。お兄ちゃんにお会いになつた？

右の例は、京都における若年層者の文表現である。

孫や子どもへの質問表現では、「エ」などの文末詞を使用して、次のような質問表現が行なわれている。

○マー ドー シタン エ。まあ、どうしたの？

○アンタ コレカラ ドコ イク ネエ。あんた、これから、どこへ行くの？

全国共通の文末詞「カ」の見られる質問表現は、次のように行なわれている。

○オイキヤスカ。お行きになりますか？

○ウチノ オジーサンニ オアイヤシタ カー。うちのおじいさんに、お会いになりましたか？

○ソレデ ヨロシー カー。それでよろしいか？（店の女主人が主人へ）

当方言における質問表現の姿勢は、聞き手に対して、きわめて、ひかえめである。

四、説明表現

○ムカシワ ソンナンデシタ ワ。昔は、そんな（状態）でしたわ。右の例は、過去を回想した、説明表現である。

○オヤヨリ サキ ジナハルト サカサマゴト チユイマス！
ワ ナー。ムスコサンデモ ナクナツタリ シヤハルト ネー。親より先に死になさると、逆さまごと（と）言いますわね。息子さんでもなくなったりしなさとねえ。

右は、特定個人を主語としない説明表現である。このように、通常の説明表現にさえ、尊敬の助動詞「ハル」が使用される。

○コトバガ ヤサシーカー ソーユー カンジガ スル ワケデス ナー。（京都の）ことが、やさしいから、そういう（やさしい）感じがするわけですねえ。

これは、土地人が、京ことばの印象を解説したものである。

五、吐懐表現

心中の思想を吐露したり、主張したりするのが、吐懐表現である。多様な心象が、ここに表現される。

○ワタシ キョーワ ウチニ オリマツセ。私（は）、きょうは

家におりますよ。

右には、話者の意向が、表現されている。次のは、話者の意欲が表現される。

○ソイデ アサノ ウチニト オモテネ。それで、(洗濯は)朝のうちにと思つてね。

次のは、話者の判断が表現される。

○フロ サキー ハイッテ サキー イナハンノデッサカイニ
ホンデニ ナンモ カマシマヘン ネンナ。風呂(へ)先に入つて、先に帰るなさるのですから、だから、何も構わないのですね。

○フユノガ カナン。 (夏よりも) 冬の(方)が、かなわない(たえられない)。

次のは、聞き手が、相手の意見に反撥する表現である。

○ミナ ツカワハルサカイ ソー ナンノト チガイマス カ。

みな、(京都語を) 使いなさるから、そうなるのでは、ありませんか？

質問形式をとることによって、吐懐表現が、婉曲に、仕上げられている。これは、京都のことばの一特質である。

六、依頼表現

「タノム(頼む)」ことが、依頼表現の基本である。

○ホナー オクサン タノシマツ セ。では奥さん、頼みますよ。

次に掲げる文例にも、「タノム」という依頼の表現形式が見える。

○ドーゾ ヨロシユー オタノミ モーシマス ワ。どうぞよろ

しく、お頼み申しますわ。

○ココ チョット ニサンニチ ルスデ オタノミシマツセ。
ここしばらく、二、三日、留守でお頼みしますよ。

七、願望表現

○ドーゾ ヨロシユー オネガイ モーシマス。どうぞ、よろしくお願い申します。

○ドーモ スミマセンケド ヨロシユー オネガイ イタシマスワ。どうもすみませんけれど、よろしく願いますわ。

○スミマセンケド ヨンデ イタダケマセンザロ カー。すみませんけど、読んでいただけませんか？

右の三例には、丁寧でひかえめな態度が、よく出ている。

八、勸奨表現

玄関先の訪問者に、上るよう勧める表現がある。

○マー アガツクレヤス。まあ、上ってください。

他人であれば、かならず断ると予想して、二回ほど、右のような挨拶が行なわれる。

たとえば、座布団を出して、「アガツクレヤス。」と誘う。

「ア、ソー カー」と言つて上るのは、「シンルイノ ヒトシカオヘンケド」とのことである。勧められるままに、「アガラシテモラオ。スミマセン ナー」と応じては、礼儀知らずの、軽率者とみなされる。

「どうぞしましょう」と誘う言いかたに、

○カーサン ゴハン イタダキマシヨ。母さん、ごはん(を)

いただきます。

がある。「マシヨ」は、「マヒヨ」となりがちでもある。

○カーサン ヨバレマヒヨ ナ。母さん、いただきますよ。

九、命令表現

命令表現には、誘導から、きめつける命令までが、含まれよう。

誘導の意味の命令に、

○コッチー オイナイ ナ。こちらへいらっしやいよ。

のような表現が、頼用される。古老は、「イラッシャイ」などを、あまり使わない。あらたまれば、

○スママセンケド コッチー キト オクレヤス ナ。すみませんけれど、こっちへ、来ておくれなさいね。

のような表現が、行なわれる。

勧誘の意味の命令に、

○マー イッペン イロマチーデデモ タンネテ オミーヤス。

ソラー オモシロー オッシャロイ。まあ、いっぺん、色町でも訪問してごらんなさい。それはもう、おもしろうございませう。

のような表現がある。

隣家の子の受験勉強を、「激励」する意味の命令表現に、「ヤス」が見える。

○シツカリ マー オキバリヤッシャ。しっかり、まあ、がんばりなさいね。

次に、動詞の連用形による命令表現がある。軽い敬意が醸成され

る。目下の者への命令表現には、以下の表現が、使用されがちである。

○アレ ミトー オミ。あれを、見てごらん。

○サツサト オアルキー ナ。シンキクサイ ナ。さっさと歩きなさいよ。めんどくさいねえ。

○ソレ オヤリ。シセー ヨー シテ……。それ、おやり（なさい）。姿勢をよくして…。

十、禁止表現

禁止表現を、次に、禁止の度合のゆるやかな表現から、きびしい表現へと、記述する。

○テレビワ メニ エー コト オヘンデー。テレビは、目によいことは、ないよ。

右は、事実の提示または、忠告の表現である。禁止の意味あいだが、薄い。「オヘン」が、注目される。

○ヤメトイテ。クレヤス。ゴソソパイ ナイヨ。やめておいてください。ご心配（の）ないように。

右の例では、「ソソトイテ クレヤス」が注目される。次に、「ソソしないでおけ」と、婉曲に禁止する表現法がある。

○セント オキ ヤー。ホンマニ。しないでおきなさいよ。ほんとうに。

また、「ソしたらあかん」という表現形式が、注目される。

○ソソナ コト シタラ アカン ガナー。そんなことをしたら、だめじゃないか。

以上、「ソおへん」「ソおくれやす」「ソせんとき」「ソあ

ん」の四表現形式が、ここでは、禁止表現の形成にあずかるものとして、注目される。

十一、打消表現

京都市中京区辺域での打消表現では、「言わぬ」を、「言いはしない」のように、助詞「は」を介する言いかたに、特色がある。

○ソレワ イワシマセン ナ。それは、言いはしませんね。

○コッチカラ エー コト ワカラシマヘン ネア。こっちら言うこと(が)、(相手に)分りはしませんのよ。

○ソナイニ アノー キョーヨーテ アラシマセン。そんなに、あのう、敬養って、ありはしません。

○イマワ イク ヒト アラシマセン。今では、(八朔の挨拶に)行く人(は)ありはしません。

○イヤ、ヒカシマセン。いやや。(牛車は)引きはしません。打消過去の表現においても、

○キガ ムカナダラ……。気が向かなかつたら……。のように、「ナナダ」を言うことは、少ない。むしろ、次の文例のように、「ヘナナダ」を言うほうが、多い。

○イカヘナナダ ワ。行きはしなかったわ。

打消表現では、「セン」が「ヘン」「ヒン」と音転化する現象は、常習のこととされよう。

○アイダー デハラシマヘンシ……。間は、出なざりはしないし……。

○バケツニ オイモー モロテ カエルチュヨナ コト デキヒン。バケツにさつま芋をもらって帰るといふようなことは、できない。

さて、打消の表現では、もう一つ、「オヘン」がある。(これは、禁止表現の項でも、述べた。)

○イタイ コト オヘン デ。痛いこと(は)ありませんよ。

十二、推量表現

推量の表現で、「ヤロー」が使用されることは、言うまでもない。「とちがうか」という表現形式が、注目される。

たとえば、空模様を見て、雨が降りそうならば、推量表現がある。

○ダイブ フラナダハカイ モー ソロソロ フルノト チガウカ。アメカモ ワカラン エー。だいぶん、(雨が)降らなかつたから、もう、そろそろ、降るのではないだろうか。雨

かもわからないよ。

○ヒョットスルト アメカモ ワカラン エー。ひよっとすると、雨が降るかもわからないよ。

ここには、断定することを避けた表現が、見える。話者は、表現心意を内省して、次のように言う。

「チョット ヤワラコーメニ イーマス ナー。アメヤ ガナー チュヨナ コトワ イワシマヘン ナー。メッタニ。ちよっと、

柔かめに言いますねえ。雨やがな」といふようなことは、言いはしませんね。めったに。」

京都人の表現気質は、ヤワラコーメニ イーマス ナーに、表わされている。

次に、天候以外の推量について考える。確認の上に推定する場合は、「とちがうか」が、行なわれる。

○ソソナ タント キモノ キタラ アツイノト チガウカ。
イチマイ オヌギー。そんなにたくさん、着物をきたら、暑い
のではありませんか。一枚おぬぎよ。
また、話者の推定をたしかめるときに、右と同形式の表現が、見え
る。

○セツカク オイキヤシタテ ルスト チガイマス カ。せつか
くお行きになったとしても、留守ではないでしょうか？

○ダーレモ イヤハラヘンノト チガウ カー。ルスト チガウ
カ。誰もいなさらないのではないですか。留守ではないかい？
これらは、話者が、正否の判断を保留し、聞き手にゆだねる表現形
式である。この表現発想法は、京都ばかりでなく、近畿圏の方言に
も、広く認められる特徴である。

以上、筆者は、12の文表現類型について、京都市中京区辺域にお
ける、町家の方言生活の特性を記述した。

(一九七九・二・九)

参考文献

- 1 藤原与一『方言の山野』昭和四十八年四月
- 2 泉井久之助「淀川沿岸地方におけるドス・ダスの分布について」
昭和七年一月
- 3 榎垣実『京言葉』昭和二十一年十二月
- 4 井之口有一・堀井令以知『京都語位相の調査研究』昭和四十七
年一月

(本学助教授)